

海外招待講演

Invited Lecture / 2026年9月12日（土） 11:00 – 12:00

第4会場（4階 国際会議場） | 座長 倉林 工（新潟南病院 女性診療科・婦人科）

妊娠・授乳関連骨粗鬆症

原因究明と回復をめぐる課題

— 生理的適応・自然回復・治療介入を考える —

The Challenges of Investigating Causes and Recovery from Osteoporosis Associated with Pregnancy and Lactation



Christopher S. Kovacs 教授

Christopher S. Kovacs, MD

ニューファンドランド記念大学 教授 / Memorial University of Newfoundland, Canada

妊娠・授乳期の骨量減少は多くの場合、断乳後に回復する。一方、まれに多発椎体骨折を来し、薬物療法の適応と選択には未解決の課題が残る。

講演要旨

01 妊娠中は腸管吸収が約2倍

生理的適応によりカルシウム・リン吸収効率が高まり、通常は母体骨からの著明な骨吸収を回避する。

02 授乳期は骨吸収が生理的に進む

完全母乳を6か月続けると腰椎BMDは平均5～10%低下し、母体骨が乳汁カルシウムの主な供給源となる。

03 断乳後、多くは骨量・強度が回復

通常は断乳後に元の水準へ戻るため、出産回数や授乳そのものは長期的な骨粗鬆症リスクとはならない。

04 まれな重症例の治療は未確立

多発椎体骨折を生じてても自然回復が見込まれる。薬物療法の必要性、開始時期、薬剤選択の検証にはRCTが必要である。

略歴 / Biography

カナダ・ニューファンドランド記念大学 University Research Professor。内科学（内分泌・代謝）、産婦人科学、生物医科学教授。妊娠・授乳期および胎児発育における骨代謝を研究し、原著論文150編以上、教科書分担執筆56章。『Maternal-Fetal and Neonatal Endocrinology』第2版（2025年）編者。